

障害者による運動行動と内的要素に関する研究

深井 康平 (静岡大学)

1. 目的

本研究の目的は、障害者のスポーツ実施の実態(運動行動)別に、その背景・要因と考えられる内的要素について明らかにすることである。具体的には障害者の運動実施頻度群別にスポーツ価値意識と経験価値の差異や関連を言及していく。

2. 研究方法

- 1) 対象者：全国のスポーツクラブで活動する身体障害者
- 2) 調査方法：郵送配布・Web アンケート併用の質問紙調査法
- 3) 分析方法：因子分析、クラスタ分析、一元配置分散分析、相関分析を用いて運動実施頻度群別のスポーツ価値意識・経験価値について比較した。

3. 結果と考察

1) 運動実施頻度群の属性

運動実施頻度の回答を基に、低頻度実施群(49名, 29.9%)、中頻度実施群(66名, 40.2%)、高頻度実施群(49名, 29.9%)に群分けした。低頻度実施群においては70代以上の割合が有意に高い値を示した。高頻度実施群においては30代未満の割合が有意に高い値を示した。

($\chi^2=25.282, df=14, p<.05$)

2) スポーツ価値意識の比較

スポーツ価値意識因子(娯乐的志向、禁欲的志向、手段的志向)のクラスタ分析によって障害者を3タイプに分類した。それぞれ低頻度実施群は娯楽タイプ、中頻度実施群は手段タイプ、高頻度実施群は禁欲タイプが有意に高い値を示した。

($\chi^2=35.541, df=4, p<.001$)

3) 経験価値の比較

3群間による経験価値の比較の結果、習

慣的経験、教養的経験において高頻度実施群が有意に高い値を示した($p<.001$)。また連帯的経験に関して3群ともに高い値を示した。即ち運動実施頻度に関わらず、人との繋がりに強い価値意識を持っていると言える。

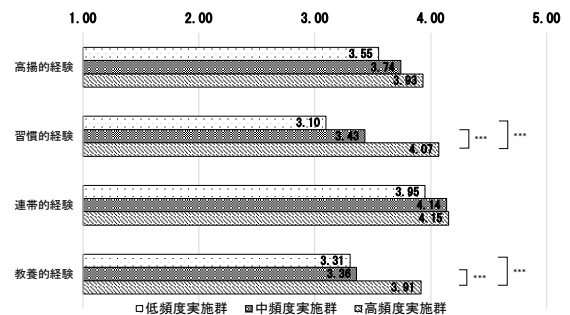


図1 3群間による経験価値の比較

4) 3群間による相関パターンの比較

スポーツ価値意識と経験価値の群別による相関については各群・項目で相関がみられたが、著しい特徴として中頻度実施群のみ娯乐的志向と経験価値(高揚・習慣・連帯)の間で相関がみられた。

4. 結論

本研究では、特に実施頻度によって運動・スポーツの価値意識や経験価値の認識に差があった。運動頻度によって娯乐的、手段的、禁欲的な取り組み方が存在していると言える。自身の障害や環境に合わせて、最も適した取り組み方を洗濯していると推察される。また、障害者は運動実施頻度に関わらず、運動・スポーツを通して「人との繋がりに」強い価値意識を持っていると言える。即ち障害者にとっては運動・スポーツが繋がりを通じた感動を与える存在であると言える。

5. 主な参考文献

- 1) 長沢伸也・大津真一, 経験価値モジュール(SEM)の再考, 早稲田国際経営研究, No41, pp.69-77, 2010